

白山市立鳥越中学校

学級数：4学級 生徒数：53人

【テーマ】

がん患者やその家族が直面する課題を通して、望ましい生活習慣について考える。

1 はじめに

本校2年生の健康への関心は低く、規則正しい生活を送っていると思っている生徒は約半数にとどまっている。そのため、「がん教育」において外部講師を招聘し、がんについて深く学ぶことは、望ましい生活習慣の大切さについて考えさせる良い機会になると捉えた。

事前のアンケート結果からがんの学習への興味関心が高く、自分や家族が健康であってほしいという願いをもっていることが分かった。また、「がんになっている人も過ごしやすい世の中にしたい」と思っていることも分かった。がんになったら生活の質を高めることができないと思っていることから、自分の家族や知人ががんになったと想定することで自分事として捉え、その直面する課題を通して自らの生活習慣と真剣に向き合い改善につながるようにしたいと考え、授業を計画した。

2 実践

(1) 保健における基礎知識の定着

がん教育については、指導すべき内容が非常に多いこともあるため、基礎知識の定着に向けて、「がんとは（要因等）」「我が国のがんの状況（罹患率）」「生活習慣とがん」「がんの予防」「がんの早期発見、がん検診」に絞って行った。がんとはどのような病気なのかを学習したあと、残りの4つのテーマについて文科省のモジュールや資料、書籍等を活用してエキスパート活動を行い、学習した内容を元のグループに戻って伝え、グループごとに課題に対する考えをまとめ

た。最後には、学習したことを基に自分に向けた「がん予防を呼びかける手紙」を書いた。

(2) 道徳科の授業との関連

がんを自分事としてとらえることができるよう、道徳科との関連を図り授業を展開した。道徳の教科書に掲載されている、猿渡瞳さんの「命をみつめて」という教材で事前に授業を行った。小学校6年生でがんと診断され余命半年と言われた瞳さんが最後まであきらめずに生きようとした姿から自他の生命の大切さについて考えることができた。

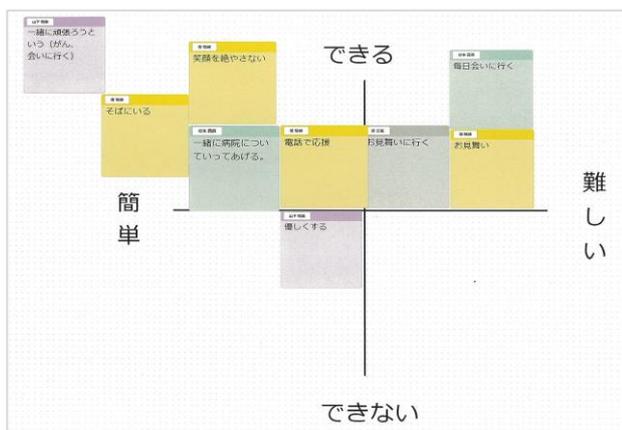
(3) 看護師とのT・Tによる授業

道徳の授業のワークシートも含め、事前学習において扱った生徒が書いたものを全てお渡し、生徒がどの程度がんについての知識を理解しているか実態を把握して授業に臨んでいただいた。「家族ががんと診断されたら、どのような支援ができるだろうか？」という課題に対して、「精神的なサポート」と「日常生活を送る上でのサポート」に絞って座標軸を活用して協議を行った。講師の先生はグループを巡回し、生徒が書いたものに対して思考を深める声かけなどをしていただいた。

授業の最後に、講師の先生に見直したい自分の生活習慣について、何か1つでも実践していることがあるかを問われたが、実践につなげている生徒はいないようだった。

そこで、一度には無理なので少しずつ改善していくようにと話された。その後、グ

ループのよい考えを全体で紹介していただくとともに、相手の気持ちに寄り添う対応の大切さについて説かれた。また、10代でもがんを患う人もいることを話され生徒たちのがんという病気への意識を高めることにもつながった。



(4) 生徒の感想

・自分の身近な人ががんになったら、見舞いに行ったり、楽しませてあげたいと思います。自分はお菓子をやるや毎日たくさん運動するなどの習慣をみにつけようとしたけど、三日坊主で終わることが多かったので、少しずつやったりして、良い生活習慣を身に付けたいと思いました。もっと自分の健康に気を向けたいです。

生徒アンケートの結果

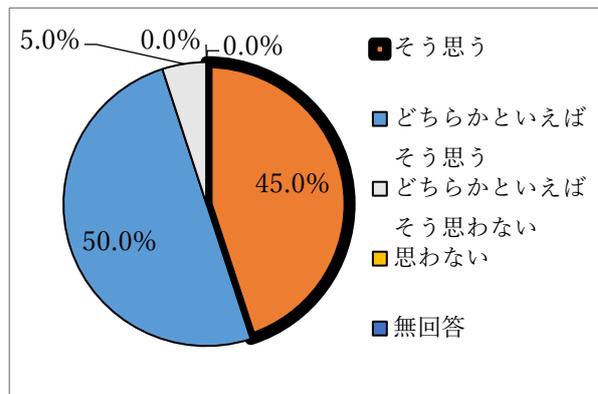
「自分のがんにならないと思う」と答えた生徒の割合が、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を合わせて事前アンケートの40%から25%に減り、がんを自分事として捉えるようになった。また、今回のテーマとの関連から「日頃からバランスの良い食事や適度に運動を行うなど健康な体づくりに取り組もうと思う」の項目で「そう思う」が35%も増えた。

さらに、本校で行っている学校評価アンケートの項目にある「自分の健康に関心を持ち、規則正しい生活をしている」への肯定的な回答でも7月の56%から14%増えるなど、がん教育を通して自身の生活習慣を見直した生徒もおり、手応えを感じる事ができた。

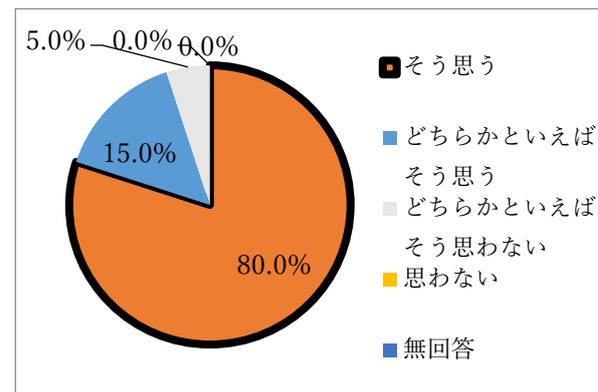
日頃からバランスの良い食事や適度に運動を行うなど健康な体づくりに取り組もうと思う

【そう思う 45%→80%】

【実施前】



【実施後】



4 実践の成果と課題

〇〇成果〇〇

日々、健康に過ごしている中学生にいかに自分事として捉え、がんというものを身近に感じることができるかをこれまで苦慮していたが、今回の授業のように、普段がん患者やその家族と接している看護師さんのお話は生徒の心に届いたようであった。がん患者さんへの緩和ケアの大切さはもちろんのこと、同時に大変さや難しさも感じ取ることができた。また、若くしてもがんを患う人もいることから、がんを予防するために自身の生活習慣を見つめ直し、少しずつ改善を図っていこうとする意識を高めることにもつながった。

今回の事業を行うにあたり、学校全体を巻き込んで取り組みができた。養護教諭には保健委員会ではがんについてのポスター作りをしてもらったり、図書館司書には教材として使えそうな本を準備してもらったり、関連本を階段の踊り場に展示してもらった。また、他学年においても道徳や学活を利用してがんに関する学習を扱ってもらうなど、学校全体でがんについて考えることができた。



◆◆課題◆◆

今回、外部講師を招いて授業を行ったことは、生徒たちの反応を見ても有意義であることは明白だが、今後も継続した取り組みにしていくことが課題である。そのためにも保健体育科の「がんの予防」の時間だけでなく、学校保健計画に位置づけ、道徳や学活、総合的な学習の時間等も使って計画的な指導となる教育課程の編成を行っていきたい。